

# 広汎性発達障がい児の登校行動と学校活動に及ぼす遅延トークンの効果

～学校と家庭との連携を通じて登校行動に及ぼす影響～

○岩橋春奈 (神戸市立東舞子小学校)      藤本進太郎 (神戸市立兵庫大開小学校)      藤田継道 (臨床行動分析学研究所)

KEY WORDS: 広汎性発達障がい 不登校 遅延トークン

(目的)

本実践の目的は、2学期に入り登校日数が徐々に減り出した不登校経験のある児童に対して、登校日数の増加及び登校時間を早くするための指導方法を見つけ出すことであった。介入までは、登校したことを褒めたり本児が好きなトランプや UNO などを教師と一緒にしたりしたが、家でゲームに勝るものではなく効果が少なかった。

(方法)

対象児、知的障害特別支援学校に在籍する小学部5年生のA児(男)。診断名は広汎性発達障害。療育手帳はB2。コミュニケーションの手段は主に音声表出言語。自分で見通しを持って行動できないと、冗談や見栄を張った発言をすることがあった。学校を欠席する理由は「しんどい」が一番多かった。登校は母か姉と公共交通機関であるバスを利用していた。

手続き、下校前に(遅延)、3つの課題を担任と振り返り、達成できていれば、家でゲームのできる時間数が書かれた「ゲーム券」(トークン)を受け取ることができる。また、金曜日には休日分の券も受け取ることができるようにし、券にはA児の好きなキャラクターを印刷した。券は家に持ち帰り、その券に割り当てられた時間だけ本児の好きなゲームをすることができるよう母親の協力を得た。さらに、表.1のような介入を行い、登校時間が早くなるようにも指導を行っていった。

(結果)

介入期1では、登校には「ゲーム1時間券」の他に、A児がすぐに達成出来そうな課題を3つ取り上げ、各々「10分券」がもらえる指導を行った。券にはA児の好きなキャラクターが印刷されていることで、券を選ぶ・集める楽しみ、家でゲームのできる楽しみの2つの好子が働き、スムーズに指導を進めることができた。6～14ssの課題従事率が78%だったため、介入期2では、①の課題を介入期1よりも活動開始時刻を10分早めた。さらに、券を「15分」に変更してA児の動機づけを高めた。そして、15～30ssの課題従事率が94%だったため、介入期3では、①の課題を介入期2よりも活動開始時刻を10分早め、さらに②のハードルを高くして、券も「15分」に変更した。これもまた、家でゲームをする時間が増えるためにA児が課題に積極的に取り組む結果となった。介入期1～3の③は、A児の積極的な課題従事行動や友達とのコミュニケーション行動であった。さらに、31～49ssの課題従事率が100%だったため、介入期4では、今までA児が拒んでいた「着替えをする」という新たな課題を入れてこの指導により登下校時の着替えも行うことができるようになった。どの介入期も、登校した日は全て課題を達成することができた。

表.1 ベースライン期と介入期の行動と対応

ベースライン期 (1~5ss)	通常の行動に通常の対応 (言語賞賛)	
介入期1 (6~14ss)	☆登校 ①ランニングをする ②勉強を頑張る ③褒められる行動をする	「1時間」 「10分」 「10分」 「10分」
介入期2 (15~30ss)	☆登校 ①朝の集いに参加する ②勉強を頑張る ③褒められる行動をする	「1時間」 「15分」 「10分」 「10分」
介入期3 (31~49ss)	☆登校 ①みんなで遊ぼうをする ②勉強を頑張る (最初から最後まで) ③褒められる行動をする	「1時間」 「15分」 「15分」 「10分」
介入期4 (50~58ss)	☆登校 ①着替えをする ②みんなで遊ぼうをする ③勉強を頑張る	「1時間」 「15分」 「15分」 「10分」

(考察)

A児は他の教師からの「〇〇ができたから1ポイント!」という1種のトークンへの良好な反応性と、課題や活動の良好な記憶から、トークンの機能を説明したルール支配行動が有効であると考え、課題の直後ではなく下校前に与えるという遅延トークンシステムを導入した。また、登校したらゲームをさせる(A児にとって最大の好子を与える)指導をしなかったのは、学校では賛同を得にくい可能性が高かったためである。親の協力により、家でゲーム券の時間分だけゲームをさせる指導が行えたことで、A児の登校行動等に劇的な変容が見られ、この遅延トークンシステムの有効性が愛眼された。この指導は「ゲーム従事時間の厳守」や「家族とのコミュニケーションの増加」といった効果をももたらした。

登校日数の増加とともに、介入する毎に活動開始時刻を早めたことで登校時刻も早くなった。行事のため早く登校したときに、教師や保護者全員で褒めたことやバス内が空いていたこと、クラスで1番に登校できたこともA児の登校行動の好子となり25ss以降は毎日遅刻なしで登校するようになった。この実践は第一執筆者と他の担任2人で行ったが、他学年の教師を驚かせるものとなった。今後の課題はトークンなしでも毎日遅刻なしで登校できるようになることである。

(IWAHASHI Haruna, FUJIMOTO Shintaro, FUJITA Tsugumichi)

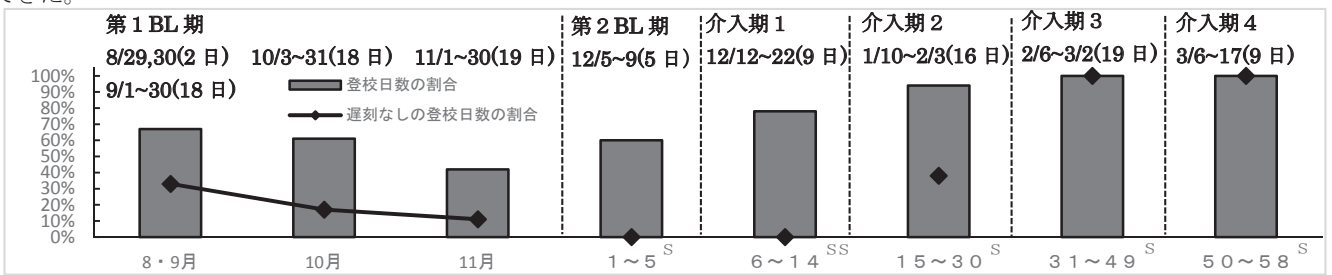


図.1 登校日数と遅刻なしの登校日数の割合の推移